

日本における成人聴覚障害者のスポーツ活動に対する意識とその現状

齊藤まゆみ*・荒川歩美**

Why Japanese Adults with Hearing Impairment Play “Deaf Sport”

SAITO Mayumi* and ARAKAWA Ayumi**

Abstract

This study seeks to clarify the consciousness involved in “deaf sport” and the current conditions of adults who play deaf sport in Japan. The participants in this study were adults aged 18–72 who belonged to Japanese deaf-sport associations. We investigated their consciousness regarding their sports activities. A total of 341 people participated in the study. The participants played sports for the sake of health and fitness and also to socialize with hearing-impaired friends and peers. These communities had wide age structures. They participated in “deaf sport” with or without deaf-school experience. They were satisfied with their current sports activity. It was found that “deaf sport” exist to help the hearing impaired to “have a dream” and to live as deaf people along with the other members. In addition, the members accepted other people who are hearing-impaired even if they could not use sign language.

Key words: Deaf sports, deaf sport, school for the deaf, sign language

1. はじめに

国内の聴覚障害者を対象とした体育・スポーツに関する研究は、1945 年以降おもに聾学校の児童生徒を対象に継続して進められ¹⁵⁾、聾学校の体育・スポーツ活動を活発にしてきた。1990 年以降は大学生を対象とした調査報告^{5,13-15)}も見られるようになった。しかし、大学生を除く成人聴覚障害者を対象としたスポーツに関する研究は、デフリンピックや競技力の高い選手を対象としたもの^{8-9,13)}に限定されており、成人聴覚障害者におけるスポーツ活動の実態は明らかにされていない。スポーツ基本計画^{注1)}で示されるライフステージに応じたスポーツ活動の推進を実現するためには、実態把握が必要不可欠である。そこで本研究は、国内の成人聴覚障害者にはどのようなスポーツ活動の場や参加の機会があるのか、また聴覚障害者はどのような意識を持っ

て活動を行っているかについて障害特性を踏まえて明らかにしようとするものである。

聴覚障害者が行うスポーツは、国際的には大文字の D を使って表記される ‘Deaf Sports’^{2,4,10)} 日本語では平仮名表記の「ろうスポーツ」¹⁷⁻¹⁸⁾として、単なるスポーツ活動とは異なる意義があるという側面も指摘されている。しかし、日本ではデフリンピックに出場する選手でも、聾学校（現：特別支援学校）に在籍したことがない者や手話を使わない環境にいる者⁹⁾も存在しており、必ずしもろうスポーツという意識を持って活動している訳ではないと考えられる。一方で、スポーツにおけるノーマライゼーションという側面から、ろう者は、障害者が健常者スポーツに参加する先陣としての役割を果たしてきた¹²⁾、聴覚障害者のスポーツについては、参加条件などはなく健常者とほぼ同様でよい¹⁹⁾という指

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

** 神奈川県立平塚ろう学校
Kanagawa prefectural Hiratsuka School for the Deaf

注1) スポーツ基本計画は、平成 23 年 8 月より施行された「スポーツ基本法」に基づき策定された。 http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/

摘があるように、国内の聴覚障害者は健聴者同様にさまざまなスポーツ活動を実施していると考えられる。しかしながら、聴覚障害者が健聴者とともにスポーツを実施する場合には、コミュニケーションをはじめとする参加阻害要因¹²⁾もあることから、聴覚障害者同士でスポーツを行っている場合も多いことが考えられる。

本研究では、固有名詞をのぞき、法律用語の聴覚障害、聴覚障害者という表記を用いる。また国内において聴覚障害者が行うスポーツ活動のことを「デフスポーツ」とカタカナ表記で表すこととし、医学的に聴覚障害の程度を表す deaf と競技スポーツに限定しない sport からなる “deaf sport” として扱う。これは、ろう者としてのアイデンティティ^{6,17-18,24)}の存在を限定しない幅広いスポーツ活動を意味し、日本特有のものである。つまり、デフスポーツ実施者の意識を把握することで、日本特有のデフスポーツの特徴を明らかにすることができる。

以上のことより、本研究はデフスポーツ実施者の活動状況と意識を把握し、その特徴を明らかにすることで生涯スポーツを見据えた学齢期聴覚障害児の体育・スポーツのあり方を検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

2. 方法

国内の成人聴覚障害者を対象に現在行っているスポーツ活動に対する意識と活動の現状について 2010 年に質問紙調査を行った。

2.1 調査対象

調査対象は、国内のデフスポーツ団体協議会に加盟する 16 団体の会員 414 名とし、341 名より回答を得た（回収率 82.4%）。16 団体とは、日本聴覚障害者陸上競技協会、日本ろう者バドミントン協会、日本デフバスケットボール協会、日本ろう者ボウリング連合、日本ろう者サッカー協会、日本ろう者武道連合、日本ろう者水泳協会、日本ろう者卓球協会、日本ろう者テニス協会、日本デフバレーボール協会、日本ろう者スキー協会、日本デフオリエンテーリング協会、全日本聴覚障害者スキー指導協会、日本デフゴルフ連盟、日本ろう者野球協会、日本聴覚障害者ラグビークラブである。

2.2 調査時期と方法

アンケートの配布と回収については、集合調査法及び郵送調査法を用いた。各デフスポーツ団体に会員への質問紙調査を依頼し、承諾が得られた団体の指定する場所において調査用紙を配布・回収した

（配布数 389、回収数 322、回収率 82.8%）。なお、スポーツシーズンの関係で郵送を指定した団体においては、郵送調査法を用いて調査用紙の配布と回収をした（配布数 25、回収数 19、回収率 76.0%）。

2.3 調査項目

2.3.1 参加者の特性

属性として、性別、年齢、職業を、また聴覚障害の程度と障害についての自己意識として、失聴時期、障害の呼称、学校歴、障害者手帳の等級、全日本ろうあ連盟への加盟について、該当する項目を選択もしくは必要事項を記入する回答形式とした。

2.3.2 スポーツ活動の実態

現在実施しているスポーツについて調査した。

1) 種目と経験年数

現在実施しているスポーツ種目名と経験年数について記述回答とした。なお、複数の種目を実施している場合は、最も重要だと考えている 1 種目について回答を求めた。

2) 目的

内閣府が実施した体力・スポーツに関する世論調査⁷⁾を参考に、聴覚障害に関する項目を加えた 10 項目「1 健康・体力づくりのため、2 楽しみ・気晴らしのため、3 ストレス解消のため、4 運動不足解消のため、5 人間的成長のため、6 自己の記録や能力を向上させるため、7 聴覚障害者の友人・仲間との交流のため、8 健聴者の友人・仲間との交流のため、9 大会でメダルを取るため、10 その他」を提示し、選択回答を求めた（複数回答）。

3) 活動状況

現在実施しているスポーツ活動について、どのようなメンバーで構成されているかを「1 聴覚障害者主体のチームやクラブ・仲間、2 健聴者主体のクラブやチーム・仲間、3 その他」で回答を求めた。

4) 現在行っているスポーツ活動についての意識

デフリンピック^{2,15)}やろうスポーツ^{10,18)}の価値をもとに、デフスポーツの意識を問う質問項目を作成した。表 1 に示す 10 項目の質問に対し 3 件法（3 思う、2 どちらでも、1 思わない）で回答を求めた（表 1）。

2.4 分析方法

調査対象は 414 名であり、341 名より回答を得た（回収率 82.4%）。そのうち、無記入や無回答の多いものを除いた 285 件を分析の対象とした。単純集計としてそれぞれの回答頻度と割合を求め、独立性の検定には χ^2 検定を用いた。また、デフスポーツの

Table1 現在行っているスポーツ活動についての意識に関する質問項目

Q1 今のスポーツ活動に満足している
Q2 メンバーに対して仲間意識を持てる
Q3 障害者スポーツとは異なる
Q4 手話ができない選手もメンバーに受け入れる
Q5 聴覚障害によるハンディキャップを感じない
Q6 聴覚障害者同士で競うことに意味がある
Q7 コミュニケーションは手話で行う
Q8 聴覚障害者自身が運営するものである
Q9 ろう文化である
Q10 ろう者として生きる夢や希望を与えてくれる

意識については、平均値±標準偏差を用い、スポーツ実施形態による2群間での比較を行った。なお、2群間に等分散性が見られなかったことからウエルチのt検定を用いた。統計的有意差は5%とした。

2.5 倫理的配慮

本研究は筑波大学人間総合科学研究科研究倫理委員会の承認を得て実施した。

3. 結果と考察

3.1 参加者の特性

3.1.1 属性

回答者の属性を表2に示した。男性207名(72.6%)、女性78名(27.4%)であり男性の割合が高かった。平均年齢は32.0±11.8歳であり、最年少が18歳で、最高齢は72歳であった。年齢を年代別に分類してみると、20代127名(44.6%)と30代77名(27.0%)の占める割合が高かった。職業については、会社員189名(66.3%)、学生37名(13.0%)、自営業10名(3.5%)の割合が高く、有職者が多かった。

3.1.2 聴覚障害の程度と障害についての自己意識

失聴時期については、3歳未満が最も多く213名(74.7%)であった。また、回答者が選択した聴覚障害に関する呼称については、ろう194名(66.3%)、難聴88名(32.3%)、無回答3名(2.5%)であった。次に、幼稚園から高等部までの学校歴についてみると、聾学校のみ在籍(以下、聾学校群)が128名(40.9%)、通常校のみ在籍(以下、通常校群)が83名(29.1%)、聾学校と通常校(難聴学級含む)

Table2 回答者の特性

N=285			
属性	項目	n	%
性別	男性	207	72.6
	女性	78	27.4
年代	20歳未満	18	6.3
	20-29歳	127	44.6
	30-39歳	77	27.0
	40-49歳	25	8.8
	50-59歳	19	6.7
	60歳以上	13	4.6
	無回答	6	2.1
職業	会社員	189	66.3
	学生	37	13.0
	公務員	8	2.8
	自営業	10	3.5
	団体職員	6	2.1
	パート・アルバイト	9	3.2
	無職	10	3.5
	その他	13	4.6
	無回答	3	1.1
失聴時期	3歳未満	213	74.7
	3-9歳	33	11.6
	10-15歳	2	0.7
	15歳以降	3	1.1
	無回答	34	11.9
障害の呼称	ろう	194	66.3
	難聴	88	32.3
	無回答	3	2.5
学校歴	聾学校のみ	128	44.9
	通常校のみ	83	29.1
	両校経験	71	24.9
	無回答	3	1.1
身体障害者手帳	1級	28	9.8
	2級	221	77.5
	3級	21	7.4
	4級	5	1.8
	6級	6	2.1
	持っていない	4	1.4
ろうあ連盟	登録している	213	74.7
	登録していない	72	25.3

の両方に在籍(以下、両校経験群)が71名(24.9%)であった。そこで、障害の呼称と学校歴との関係についてクロス集計を行ったところ、有意な関連性が認められた($\chi^2(2) = 95.0, p < .05$)。残差分析の結果、聾学校群の「ろう」と通常校群の「難聴」が5%水準で多く、聾学校群の「難聴」と通常校群の「ろう」が5%水準で少なかった(表3)。

所持している身体障害者手帳の等級については、1級が28名(9.8%)、2級が221名(77.5%)、3級が21名(7.4%)、4級が6名(2.1%)、6級が6名(1.8%)であった。また所持していない者は4名

Table3 障害の呼称と学校歴

	聾学校群 (n=128)	通常校群 (n=83)	両校経験群 (n=71)
ろう(n=194)	120*	25*	49
難聴(n=88)	8*	58*	22

*p<.05

(1.4%)であった。単一の聴覚障害では最も等級が高い2級所持者の割合が高いことがわかった。しかし各都道府県の聴覚障害者協会に登録し、全日本ろうあ連盟会員となっているものは213名(74.7%)であり、回答者のうち4人に1人は、全日本ろうあ連盟に登録していないことが示された。全国ろうあ者体育大会の参加には、全日本ろうあ連盟への会員登録が条件になっている。なお、回答者の実施しているスポーツ種目のうち、全国ろうあ者体育大会に種目があるものは、テニス、バドミントン、バレーボール、卓球、陸上競技、サッカー(男子)、バスケットボール、軟式野球である。

3.2 スポーツ活動の実態

3.2.1 種目

現在実施しているスポーツ種目について、個人種目と団体種目別に年齢とスポーツ経験年数を示した(表4)。経験年数1年から58年、18歳から72歳までの幅広い年齢でスポーツ活動を行っていることが示された。個人種目が平均年齢、経験年数ともに高い数値であるが、平均経験年数はいずれも10年以上であることから、様々な年齢の聴覚障害者の参加があり、スポーツを継続して行っていることが推察される。また、19名が調査依頼をしたデフスポーツ競技団体とは異なるスポーツ種目で回答していることから、複数のスポーツを実施している聴覚障害者の存在が確認できた。

3.2.2 スポーツを行う目的

スポーツ実施の目的については、全824件(複数回答、平均2.9件/人)の回答があった。そのうち「健康・体力づくり」が最も多く、次いで「楽しみ・気晴らし」、「聴覚障害者の友人・仲間との交流」であった(表5)。その他の意見としては、「趣味」や「生きがい」、「障害があってもやればできる事をアピールしたい」という記述があった。上位2項目は、内閣府の調査⁷⁾で、一般の成人がスポーツを行った理由として挙げられていたもの一致しており、スポーツは、聴覚障害者にとって一般成人のスポーツと同様、スポーツを行う場としての役割があると考

Table4 種目別に見た年齢とスポーツ経験年数

種目	年齢(歳)			経験年数(年)		
	平均±SD	最高	最低	平均±SD	最長	最短
団体種目(n=134)	27.9 ± 7.7	59	18	10.5 ± 7.4	30	1
個人種目(n=148)	35.2 ± 14.0	72	18	12.7 ± 9.5	58	1

Table5 スポーツの目的

項目	件数	(%)
健康・体力づくり	182	22.1
楽しみ・気晴らし	147	17.8
聴覚障害者の友人・仲間との交流	127	15.4
大会でメダルをとる	77	9.3
自己の記録や能力を向上させる	72	8.7
人間的成長	67	8.1
運動不足解消	57	6.9
健聴者の友人・仲間との交流	45	5.5
ストレス解消	38	4.6
その他	12	1.5

えられる。また、聴覚障害者の友人・仲間との交流が3位にあることから、聴覚障害者同士の交流の場としての役割も担っていると考えられた。

3.2.3 普段の活動状況

定期的に行っているスポーツ活動について、どのようなメンバーで構成されているかを聴覚障害者の仲間・クラブやチームのみと活動(以下、デフスポーツ群)、健聴者の仲間・クラブやチームとのみ活動している(以下、一般スポーツ群)、その他で多かった聴覚障害者と健聴者の両方と活動している(以下、両スポーツ群)に分類したところ、最も多かったのはデフスポーツ群で159名(56.4%)、両スポーツ群が104名(36.9%)、一般スポーツ群が19名(6.7%)であった。しかし、スポーツ群間で学校歴の偏りはみられなかった(表6)。デフスポーツ団体に加盟していても、普段の活動では一般スポーツ群である者が19名いる。それはデフスポーツ団体が主催する大会への参加資格を得るための加盟であり、普段は個人や地域のチームで練習するなど、デフスポーツとしての活動はしていない。このことから、デフスポーツは、大会参加という形態で、普段はデフスポーツと関わりのない聴覚障害者にもスポーツへの参加機会を提供していると考えられる。

一方で、デフスポーツ群や両スポーツ群では、聴覚障害者同士でスポーツを行っている。聴覚障害者は四肢体幹に器質的な異常がないことから、一般のスポーツと同様のルールで行われ、健常者とともに

スポーツを行うことができる^{2,11-12)}。しかし、聴覚障害者は、聴覚からの音声情報の入手が困難なことやコミュニケーション方法の違いなどから、聴こえる人たちの集団の中においては孤立感を感じることもあるといわれる^{12,20,23-24)}。デフスポーツは、そのような聴覚障害者にとって、スポーツ活動参加の機会や活動の場を提供する選択肢のひとつとして存在するのではないかと考えられる。

3.3 現在行っているスポーツ活動についての意識

現在行っているスポーツ活動についての意識について、デフスポーツを行っているデフ・両スポーツ群と健聴者で行っている一般スポーツ群で比較した(表7)。その結果、各項目の平均スコアより、いずれの群も今のスポーツ活動に満足している(デフ・両スポーツ群 2.75 ± 0.61 、一般スポーツ群 2.74 ± 0.56)ことが示された。各平均スコアの上位項目は、メンバーに対して仲間意識を持てる(デフ・両スポーツ群 2.97 ± 0.24 、一般スポーツ群 2.79 ± 0.54)、手話ができない選手もメンバーに受け入れる(デフ・両スポーツ群 2.81 ± 0.55 、一般スポーツ群 2.89 ± 0.46)、ろう者として生きる夢や希望を与えてくれる(デフ・両スポーツ群 2.77 ± 0.56 、一般スポーツ群 2.74 ± 0.56)と両群とも同じ項目であった。次に、デフ・両スポーツ群と一般スポーツ群で比較した結果、デフスポーツ実施の有無で差があった項目は、「コミュニケーションは手話で行う」 $t(19.2) = 2.37, p < .05$ 、「聴覚障害者自身が運営するものである」 $t(20.6) = 2.32, p < .05$ であり、デフス

ポーツ実施者がより強く聴覚障害者であることやコミュニケーションを意識していることが推察される。健聴者の中で孤立感を感じることもあるといわれる聴覚障害者にとって、メンバーに対して仲間意識を持てることは居心地のよさであり、スポーツ継続要因として重要なことである。さらに、コミュニケーションとしての手話を肯定しつつも手話ができない選手もメンバーとして受け入れるという点で、ろう文化やろう者のアイデンティティにこだわらない柔軟性を備えていると考えられる。一方でろう者として生きる夢や希望を与えてくれるという認識も高いことから、健聴者と対等である¹⁰⁾ことをスポーツを通して実感していることが推察される。また、聴覚障害者モデルとの出会いは聴覚障害児教育の領域では一般的に指摘されているが、成人期以降でも出会うことができる機会としてデフスポーツは存在している。

3.4 スポーツを実施している聴覚障害者像

スポーツを実施している成人聴覚障害者は、幅広い年齢構成であり、健康・体力づくり、聴覚障害者の友人や仲間との交流、楽しみ、気晴らしが主要な目的として共通していた。また、現在のスポーツ活動に満足しており、その理由として、メンバーに仲間意識がもてる、ろう者として生きる夢や希望を与えてくれるものであることが関連していることが示された。また、手話ができない選手もメンバーに受け入れるという柔軟性も有することから、ろう文化や障害者スポーツとは異なる価値観で特別にとらえるという意識は強くないと考えられる。

スポーツ実施者について、「聴覚障害者」といっても、その実態は様々である¹⁵⁾。滝沢は、音声言語獲得期以前に失聴している場合や、音声言語獲得期以降に失聴した場合でも幼少の時期から聾学校に学び、手話をコミュニケーションの中心にしている聴覚障害者を「ろう者」、音声言語獲得した後、高学年または社会人になってから失聴した聴覚障害

Table6 デフスポーツ実施状況と学校歴

	聾学校群 (n=128)	通常校群 (n=83)	両校経験群 (n=71)
デフスポーツ群(n=159)	73	47	39
一般スポーツ群(n=19)	5	5	9
両スポーツ群 (n=104)	50	31	23

Table7 現在実施しているスポーツについての意識

	デフ・両スポーツ群(n=247)					一般スポーツ群(n=19)					t値	p
	思う	どちらとも	思わない	平均	SD	思う	どちらとも	思わない	平均	SD		
Q1 今のスポーツ活動に満足している	207	18	22	2.75	0.61	15	3	1	2.74	0.56	0.07	
Q2 メンバーに対して仲間意識を持てる	242	2	3	2.97	0.24	16	2	1	2.79	0.54	1.44	
Q3 障害者スポーツとは異なる	117	61	69	2.19	0.85	7	7	5	2.11	0.81	0.41	
Q4 手話ができない選手もメンバーに受け入れる	218	11	18	2.81	0.55	18	0	1	2.89	0.46	0.72	
Q5 聴覚障害によるハンディキャップを感じない	167	44	36	2.53	0.74	12	4	3	2.47	0.77	0.33	
Q6 聴覚障害者同士で競うことに意味がある	184	30	33	2.61	0.71	9	8	3	2.32	0.75	1.63	
Q7 コミュニケーションは手話で行う	199	33	16	2.74	0.57	10	4	5	2.26	0.87	2.37	*
Q8 聴覚障害者自身が運営するものである	132	77	38	2.38	0.74	5	8	6	1.95	0.78	2.32	*
Q9 ろう文化である	162	40	45	2.47	0.78	9	6	4	2.26	0.81	1.09	
Q10 ろう者として生きる夢や希望を与えてくれる	208	22	17	2.77	0.56	15	3	1	2.74	0.56	0.23	

* $p < .05$

者を「中途失聴者」、補聴器の使用によって音声言語の識別がある程度可能で、音声言語をコミュニケーションの中心にしている聴覚障害者を「難聴者」と分類している²⁰⁾。一方、これらの障害の呼称については、本人によって選択や変更がなされるものでもあるという見解もある^{1,21)}。協中は「障害の呼称の違いによる意識の違い」について調査した研究において、聴覚障害者本人が用いる障害の呼称と聴覚障害の程度が関係しているとは限らない²²⁾とも述べている。今回の調査結果では、「ろう」は聾学校群に、「難聴」は通常校群に多いことが示されたが、両校経験群では障害の呼称が限定されていないことが示された。このことから、デフスポーツを実施している聴覚障害者は、年齢・性別・職業に加え、聴力や失聴時期、学校歴、選択する障害の呼称など、多様な背景であることが示された。つまり、デフスポーツは、多様な価値観のある聴覚障害者が参加しているスポーツ活動であると捉えることができる。

聴覚障害者が行うスポーツとして、例えば、聴覚障害児を対象とした特別支援学校（聾学校）の体育や運動部活動などでは、聴覚障害者同士でスポーツを行う。しかし、学齢期以降、社会人となった聴覚障害者にとって、聴覚障害者同士でスポーツを行う機会は少なくなると推測される。このような機会は、通常学校に通っていた聴覚障害者にとってはさらに少ないと考えられる。本研究で示された、スポーツを実施している聴覚障害者は、デフスポーツ群、一般スポーツ群、両スポーツ群という実施形態に関わらず、どの群にもそれぞれの学校歴を有する者がいる。通常の学校に通うインテグレーション経験者である聴覚障害者にとって「聴覚障害者モデルとの出会い」は重要であることは聴覚障害者教育の領域では一般的に指摘されている^{3,16-17)}が、さらに砂田は、ろうスポーツはそれまでコミュニティに属していなかった耳の聞こえない人を、コミュニティに導くのに重要な役割をしている¹⁸⁾とも述べている。このことから、国内のデフスポーツは、異なる教育歴を有する聴覚障害者同士が会える機会や、聴覚障害者のコミュニティに参加する機会を提供するものでもあると考えられる。

4. まとめ

スポーツを実施している18歳以上の聴覚障害者を対象に、自身が参加するスポーツ活動状況とそれに対する意識を調査した。その結果、成人聴覚障害者は、幅広い年齢構成で、健康・体力づくり、聴覚障害者の友人や仲間との交流、楽しみ、気晴らしを

目的としてスポーツを実施している。また、現在のスポーツ活動に満足しており、その理由として、メンバーに仲間意識がもてる、ろう者として生きる夢や希望を与えてくれるものであることが関連していることが示された。

文 献

- 1) 安藤豊喜 (1991): 聴覚障害と聴覚障害者. (編) 新しい聴覚障害者像を求めて編集委員会, 「新しい聴覚障害者像を求めて」, (財) 全日本聾唖連盟出版局, 17-27.
- 2) Anne Bremner and Scott Goodman (1997): Coaching deaf athletes. Australian Sports Commission, Canberra.
- 3) 藤巴正和 (2002): 難聴者の障害受容過程に関する一考察. ろう教育科学, 44 (1): 13-23.
- 4) Gallaudet University (2011): History of the University, Presidents, Jordan, I.King. <http://www.gallaudet.edu/> (2013年9月1日).
- 5) 橋本有紀 (2006): 視覚および聴覚障害学生に対する体育実技指導アンケート回答集. 筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター報告書.
- 6) 木村晴美・市田泰弘 (2004): ろう文化宣言. (編) 現代思想編集部, 「ろう文化」, 青土社, 8-17.
- 7) 内閣府 (2009): 体力・スポーツに関する世論調査. 内閣府.
- 8) 中島幸則・桜庭景植・笠井美里・竹腰英樹・金 玉蓮・加我君孝 (2010): 成人の先天性聴覚障害者の平衡機能と視機能の評価. 日本臨床スポーツ医学会誌 18 (2): 297-304.
- 9) 中村有紀 (2009): デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関するアンケート調査報告書. 筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター報告書.
- 10) National Association of the Deaf (1981): Deaf Heritage. -A Narrative History of Deaf America-, National Association of the Deaf, Maryland.
- 11) 及川 力 (1995): 知られざる聴覚障害者スポーツ. Proceedings of the 2nd Tsukuba International Workshop on Sport Education, 23-28.
- 12) 及川 力 (1999): 21世紀における聴覚障害者のスポーツ環境. 戸山サンライズ 175: 8-11.
- 13) 齊藤まゆみ・及川 力 (2005): メディアを活用した聴覚障害学生のためのエアロビクスダンス指導. スポーツ教育学研究 25 (1): 43-50.
- 14) 齊藤まゆみ・後藤邦夫・大山 (下) 圭悟 (2007): 共通体育における聴覚障害学生の現状とサポー

- トモデルの検討. 大学体育研究 29 : 21-28.
- 15) 齊藤まゆみ (2011) : 聴覚障害者の体力・運動能力と視機能. 障害者スポーツ科学 9 (1) : 3-14.
 - 16) 坂田浩子 (1990) : 聴覚障害者の自我同一性について. ろう教育科学 32 (2) : 61-68.
 - 17) 末森明夫 (1999) : ろう者の社会生活. (編著) 中野善達・吉野公喜, 「聴覚障害の心理」, 田研出版, 173-188.
 - 18) 砂田武志 (2000) : ろう者とスポーツ. 現代思想編集部, 青土社.
 - 19) 田内 光 (2008) : 障害者のスポーツ参加への条件 聴覚障害者. 臨床スポーツ医学 25 (6) : 635-637.
 - 20) 滝沢広忠 (1999) : 聴覚障害者の心理臨床 今後の課題. (編) 村瀬嘉代子, 「聴覚障害者の心理臨床」, 日本評論社, 147-170.
 - 21) 脇中起余子 (2002) : 聴覚障害者本人および親の意識調査 (2) - 障害の呼称の違いを中心に -. ろう教育科学 (3) : 115-128.
 - 22) 脇中起余子 (2009) : 聴覚障害者教育 これまでとこれから, コミュニケーション論争・9歳の壁・障害認識を中心に. 北大路書房.
 - 23) 渡邊儀一 (2013) : 聴覚障害者からみたスポーツのパースペクティブー「当事者性」重視のスポーツプロモーションとはー. 筑波大学大学院体育系修士研究論文集, 35 : 477-480.
 - 24) 山口利勝 (1998) : 聴覚障害学生の心理社会的発達に関する研究 - 健聴者の世界との葛藤とデフ・アイデンティティの影響 -. 教育心理学研究 46 (4) : 422-431.